



2019年9月8日（日）10:00~14:00 開催

講師：アーティスト：井上尚子 + 嗅覚研究者：白須未香
 場所：奈良県立図書情報館 1階交流ホール

コンセプト

図書館の本、古書、家の本には、人の歴史、時間、文化の軌跡があります。私たち人間の肉眼では可視化できない本の旅路、人との関係性を本の紙の痕跡、残香から紐解き、匂いの感受から自分や他者を知り、双方の記憶を語らうことで、多角的視点、感覚を養います。
 2017年秋～2018年冬までミュンヘン（ドイツ）の Museum Villa Stuck で開催した展覧会「Die Bibliothek der Gerüche at Museum Villa Stuck, in Munich」（和訳：「匂いの図書館」展）を、日本では2018年5月末を皮切りに、六本木アートナイト、2019年、3331アートフェア、玉川大学アートギャラリーでワークショップを開催し、これまで総勢約27000人が作品と触れ合いを築いてきました。これらの本たちが更なる時と人との触れ合い、嗅ぐ行為により変異していく過程を奈良県立図書情報館でも9月8日に開催しました。



Photo: 南俊輔 / 玉川大学

ワークショップの報告

参加者13名（女性12名、男性1名／平均年齢35～40歳）と共に約3時間、“本の匂いを楽しむ”ワークショップを開催しました。右図のドイツの展覧会の記録紹介と共にこのプログラムが誕生した経緯をアーティスト：井上尚子が解説し、参加者の匂いに対する興味を引き出しました。嗅覚研究者：白須未香氏より人間の嗅覚の仕組み、人それぞれ異なる嗅覚受容体、感受の違いをアンドロステノン（汗の匂い成分）、ベータ・イオノン（スマレの花）の匂いを嗅ぎ分け、感じる人と感じない人がいることを知り、リアルな体験から匂いと向き合う機会になりました。参加者中、約1/3ずつ、それぞれの匂いの感受の違いが出て、嗅げた人もそうでない人も、各自その結果に対する驚きから、それでもいいのだ！という体感に納得し、自信に溢れた顔を見る事ができました。



会場展示風景



自己紹介タイム：自分の気になる匂いについて話す



アンドロステノン、ベータ・イオノンの嗅ぎ比べ



白須未香氏：ドイツの本の匂い分析に関するレクチャー



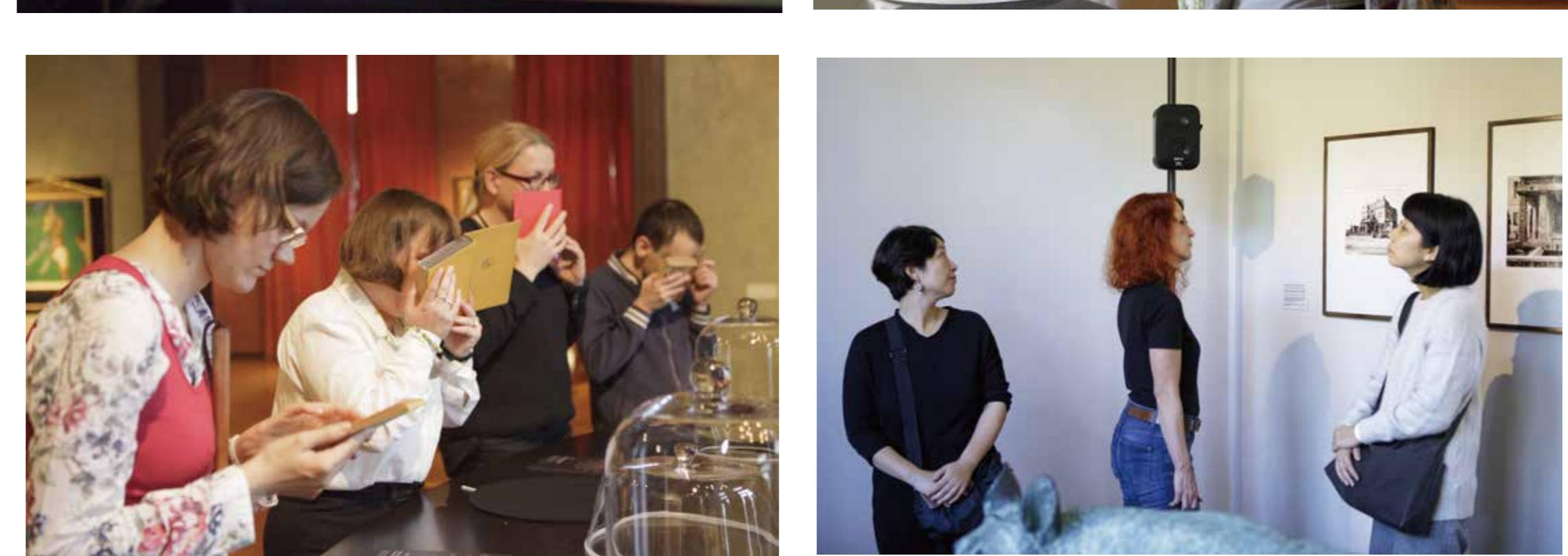
レクチャー後、午前中のメイン・アクティビティとして、10冊のドイツの本の匂い、手触り、匂い成分が入った18本の瓶を嗅ぎ、参加者それぞれの感じ方の違いを楽しみました。



本のタイトル、ジャンルからは想像もつかない人の痕跡を嗅ぎ分けることもあれば、甘くてまるで洋菓子を食べたくなるような本にも魅了されました。上記の白須さんからの匂い体験で汗の匂いを敏感に感受する人は、本から人の痕跡を見つけることができたり、新たな本へのアプローチに集中していました。

ミュンヘン（ドイツ）の展覧会紹介

この展覧会は、“本の匂い”をテーマに人間と本の関係性に着目し、無意識な人の仕草や感情が、本に物質的な影響を与え、紙やインクの匂いへの気づきが、他者や周囲への関心、及び自分を知る機会となることを提唱しました。また、展覧会の裏テーマとして、人間の時間軸をメタファーに本の寿命を推考し、人が手に触れ紙面に堆積した指紋やドッグアイの跡、環境が及ぼす影響が、本の生まれ持った属性では語れない未来を担い、粗雑な扱いを受け短命になる本もあれば、図書館などに保管されて長寿を全うする本もあるだろうことを踏まえ、多種多様な本の運命を来場者に託してみました。展示を活用してワークショップを15回開催し、様々な人の反応と回想された記憶の対話を育み、未来の記憶を築いていきました。



Ricochet #11 “Die Bibliothek der Gerüche” 10/07/2017-01/14/2018
 Collaboration work: Mika Shirasu and Takuro Shibayama
 Curator: Anne Marr

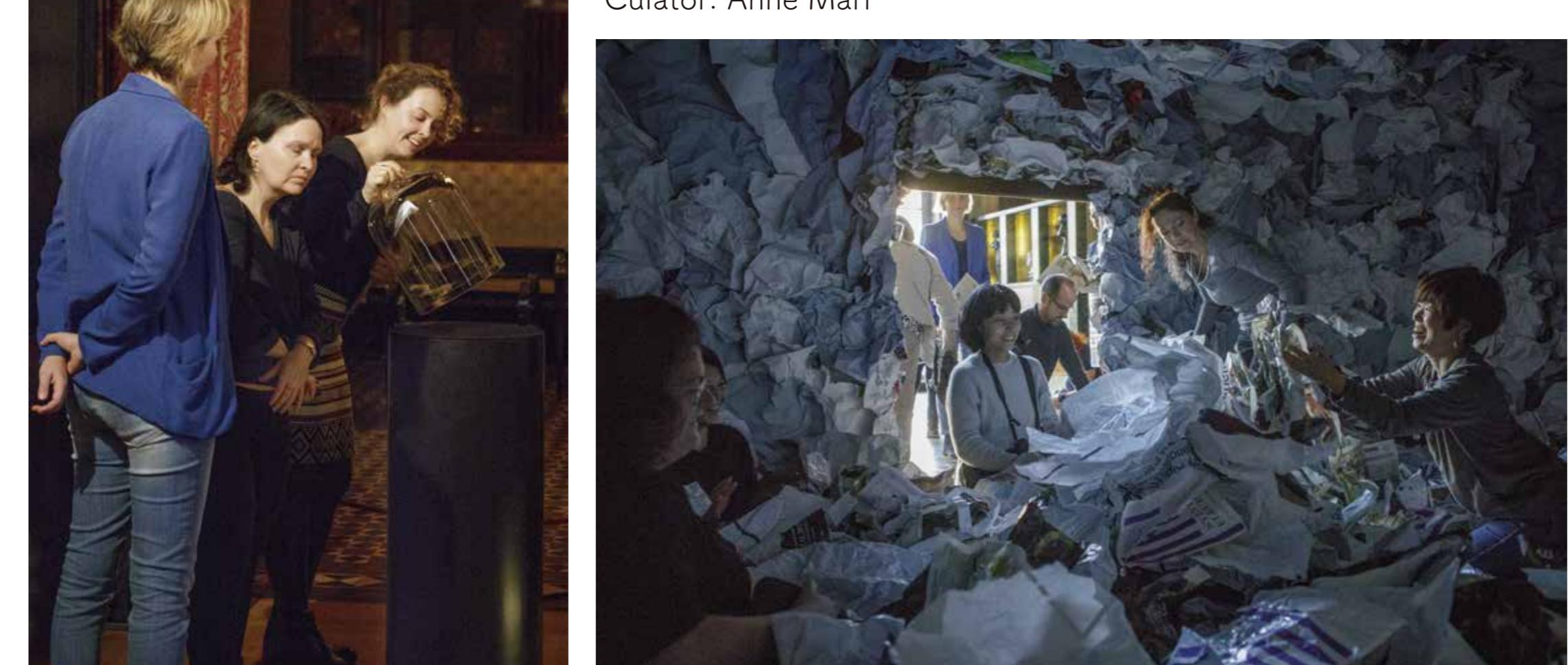


Photo: Barbara Donaubauer

作品協力：MUSEUM VILLA STUCK in Munich(Germany)、ERATO 東原化学感觉シグナルプロジェクト (JPMJER1202)
 未来社会創造事業 (JPMJMI17DC)、JSP 科研費 (18K14651)、玉川大学芸術学部、アーツ千代田 3331

奈良県立図書情報館
 Nara Prefectural Library & Information Center